

〔書評〕

チャールズ・R・ライト 小林栄一訳

「マス・コミュニケーションの理論」

山本 明

（一億総白痴化）といった文明論的功罪論のかたちで、マス・コミュニケーションの機能とそのつくとだす諸状況について論議がおこなわれることは、かなりすくなくなってきた。このことは、テレビをはじめとする龐大なマス・メディアが急速に普及したことに主要な原因をもとめることもできようが、さらに、〈警戦法闘争〉から〈安保闘争〉の過程において、マス・メディア内容の政治的・イデオロギー的側面のもつ重要性が、多くの人々に実感されたからともいえるだろう。また、マス・コミュニケーション理論の進歩が、メディア内容と効果とを直結させる単純な功罪論的論議を許さなくなったという理論研究の発展もつくくわえる必要があるだろう。W・シュラムは、「マス・コミュニケーション」第二版序文で、初版刊行以降十年間に、この分野にいちじるしい発展があったことをのべて、カッツやラザリスフェルドの研究をあげているが、たしかに、アメリカはもちろんのこと、わが国においても、〈コミュニケーションの二段階の流れ〉説をデコとして、従来の概念的論議からの脱皮による理論の精密化がみ

られることも事実である。

だが、以上のようなマス・コミュニケーション理論の発展による「マス・コミ功罪論」への一応の終止符は、ただちにマス・コミュニケーション理論にたいする受け手側からの政治的・社会的諸要請を満足させるものではない。むしろ、「マス・コミ功罪論」の止揚のうえに、社会的経済的構造とマス・コミュニケーション過程とのからみあいについてのアプローチがこころみられなければならない。

ここでとりあげるチャールズ・R・ライトの「マス・コミュニケーションの理論」(Mass Communication, A Sociological Perspective, 1959)は、従来のアメリカにおける研究成果を展望・整理したもので、とりたててあたらしい視角や理論を展開したものではないけれども、それだけに、マス・コミュニケーション理論の発展や現時点での課題をしるのに便利な本といえる。

著者は、「本書は小型教科書ではない。……むしろ本書の目的は、この新しい分野への入門書たることである」とのべて、「マス・コミュニケーション研究の主な部門を読者に紹介すること」をその眼目としている。そして、著者が一つの主張をもって本書で追求し、論議するテーマは、マス・コミュニケーションの社会的効果の問題であった。このテーマを、著者は次のような構成叙述で展開している。

第一章「マス・コミュニケーションの性格と機能」は、マス・コミュニケーションの機能と逆機能について問題を提起しつつ、機能的分析の必要性をとく。第二章では、主として記述的方法を

「マス・コミュニケーションの理論」

とりながら、ソビエト、イギリス、カナダ、アメリカおよび非工業国におけるマス・コミュニケーション制度を概観し、アメリカにおける特質をあきらかにしようとする。第三章「受け手の社会学」は、本書でもっとも重点がおかれている章であろう。著者はマス・メディアと受け手個人とを直結する(注射針的図式)を、カット、ラザースフェルドなどの研究成果によって批判しつつ、マス・コミュニケーション過程におけるインフォーマルな個人間ネットワークのもつ重要性を指摘している。ここでは、一九四〇年大統領選挙についてのラザースフェルドの研究からはじまって、R・マートンの調査、カット、ラザースフェルドの「パーソナル・インフルエンサー」を要約しつつ、「マス・コミュニケーションの二段階の流れ」説を強調する。第四章「アメリカのマス・コミュニケーションの文化的内容」は、ベレルソンの内容分析法によりながら、これまでにおこなわれてきた雑誌・テレビの内容分析を紹介する。最後の第五章「マス・コミュニケーションの社会的効果」では、第一章で提出された諸課題の再検討がこころみられているのであるが、マス・メディアの社会的影響にかんする数多くのテーマのなかで、とくにメディア接触と少年犯罪との関連が、「社会化」過程として記述され、さらに、ケイト・スミスの戦時国際マラソン放送・シンシナティ計画などを引用しつつ効果の大家説得の方法を論じている。

こうして、著者が一貫して検討し追求するのは、マス・コミュニケーションの社会的効果を把握するために、マス・メディアと受け手との間の社会的媒介変数をあきらかにするということであつた。著者は、この媒介変数を、個人の心理学的次元よりも、

むしろ、社会学的小集団にもとめる立場をとっており、その実証として機能的分析の成果を利用することによってこの立場の補強につとめている。しかし、著者は、自己の立場を強く主張するあまり、調査成果をやや一方的に利用する傾向がないとはいえないのだが、ともあれ、本書の特徴をいくつかあげることができる。

まず第一に、マス・コミュニケーション研究における戦後十五年の諸調査を二段階、説によりつつ整理し、研究課題の所在がおのずからあきらかとなるように構成されている点にある。第二の特徴は、本書がたんに研究成果の後づけにおわっているだけでなく、先にのべたように、これまでの研究成果の集積と秩序づけによるマス・コミュニケーション理論の体系化への一つのこころみをひめているという点にあるだろう。したがって、われわれは本書によつて、マス・コミュニケーション理論の原産地アメリカの傾向とその数多い収穫とを容易に概観することができるのである。

しかし、このことは本書で展開されるマス・コミュニケーション理論が、そのままわが国で適用されて充分だということの意味するものではない。それは、まず両者の社会的政治的条件のちがひといった点でおさえることもできようが、より基本的には、両者の問題意識のちがひにもとめられる。本書がある程度あきらかにしているように、アメリカではマス・コミュニケーション研究の主要課題が送り手と受け手という図式にのつた効果論の範囲におかれているのにならして、わが国では、大ざっぱにいえば、送り手と受け手との矛盾および相方内部の矛盾を社会経済構

造との関連のなかで把握しようとする努力がみられるといえる。このことは、たとえば本書が強調する小集団の認知についても、前者が小集団を解釈し、効果論の範囲で議論する傾向にあるのにならして、後者はそれを運動過程のなかで把握しようとする志向がつよいといった点に顕著にみられよう。

このような両者のちがいは、たんに問題対象のちがひというばかりでなく、巨視的には、イデオロギー概念の把握の決定的相違によるものであり、いいかえれば、体制・国家権力にたいする姿勢のあり方によるものである。たとえば、マス・コミュニケーション研究を社会学的研究に限定したとしても、大衆的な政治・社会組織とその運動が、マス・コミュニケーションといかなるかわりあいをもつものかといった問題にはまったくふれられていない。さらに、大衆の自然発生的意識やその行動と、意識的組織的運動との関連および前者から後者への移行過程でマス・メディアがいかなる現実の意味をもつのか、といった受け手側からの問題は、本書ではほとんど無視されていることがあげられる。

さらに本書では、政府・軍部・大企業などが登場しても、それらはアメリカ的常識にしたがって権力構造として受け手と対置して扱えられていない。そのために、マス・コミュニケーション内容の政治的・イデオロギー的意味が社会的矛盾と政治状況のなかでどのように機能するかがほとんど語られないのである。一九五三年朝鮮戦争の最中、マス・コミュニケーション内容の反動性と好戦性を告発したアルバート・カーンの「死のゲーム」は、理論的には「注射針的図式」であつて全面的にうけいれられないとしても、本書でふれられていない基本的観点をもつているといえ

る。また、カ・ンをひきあいにはさずとも、マス・コミュニケーション・シヨンの現状維持機能・政治的麻痺機能などについて、カ・ン・ラザースフェルドなども一応は指摘しているし、C・W・ミルズは小集団の〈再発見〉と〈世論製造業者〉との関係についてもきびしく告発しているのだが、本書の著者は、このような政治的機能をめぐる問題は、とくに第五章の構成であきらかなように、つとめてさげているようである。

したがって、本書におけるマス・コミュニケーションの微視的あるいは機能的把握を、いかに社会体制との関連のなかで本質的・構造的に把握するかという課題は、われわれの手に残されている。本書の論理にたいする批判は、たんに巨視的イデオロギー批判におわるだけでなく、この分野における積極的理論の展開が必要である。

本書の訳者である本学助教授小林栄一氏は、本年二月有為の身で永眠された。「訳者あとがき」のなかで、氏は「訳者の個人的事情のため、翻訳に多くの時間をかけることができませんでした」とのべているが、この「個人的事情」こそ、五カ月後の死にむかっていたたかひであった。この訃報は、氏の最後の仕事であり、本書を手にとるたびに私の心はいたむ。氏の御めいふくをいのる次第である。

(1961. 4. 15)